



感染症とたたかう

第16号

2017年
3月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

ほっぺが赤くなる**伝染性紅斑** 5～9歳の子どもに最も多く発生



頬に赤い発疹、続いて手足にも 春から夏にかけてやや増加

伝染性紅斑は、「ヒトパルボウイルスB19」による感染症です、両頬がリンゴのように赤くなることから、「リンゴ病」と呼ばれることがあります。国立感染症研究所の調査によると、毎年春から夏にかけて、弱い流行がみられます。子どもがかかることが多く、最も発生が多いのが5～9歳で、次いで0～4歳とされます。

このウイルスに感染すると、10～20日の潜伏期間の後に、頬が発疹のためにリンゴのように赤くなり、続いて手や足にも網目状の発疹が現れます。胸や腹、背中にも発疹が出る場合があります。

発疹は1週間ほどで消えますが、なかには長引いたり、再び発疹が出たりすることもあります。

頬に赤い発疹が出る7～10日前に、微熱や風邪のような症状が見られることもあります。症状は軽くすむことが多いのですが、実はその期間にウイルスが感染者から最も多く排出されています。逆に、発疹が現れたときにはウイルスの排出はほとんどなくなっています。

大人では、ヒトパルボウイルスB19に対して免疫を持っていない人が感染しても、症状が出ないこと（不顕性感染）がほとんどです。しかし、発疹が出たり関節に腫れや痛みが出たりすることもあります。関節の腫れと痛みは1～2週間でおさまりますが、手や腕、膝の関節が痛むことが多いため、歩くのがつらい場合もあります。



咳やくしゃみの飛沫で感染 手洗いやうがいの励行で予防

伝染性紅斑の原因であるヒトパルボウイルスの感染経路は、感染者の咳やくしゃみの飛沫に含まれるウイルスを吸い込むことによる「飛沫感染」と、これらの飛沫が付着した食器や道具、スイッチなどに触れた手で口や鼻に触れることによる「接触感染」の2つです。

伝染性紅斑には予防接種がないので、予防するには、手洗いやうがい、咳エチケットという、ほかのウイルスの病気の予防と同じ方法が有効です。ただ、頬などに発疹が現れて伝染性紅斑にかかったと分かったときには、すでにウイルスはほとんど排出されていません。それ以前のウイルスが最も多く排出されている時期には、それと気付かず手洗いなども頻繁にやらないために、家庭や学校のクラス内で感染が広がってしまうことがあります。

伝染性紅斑の場合は、症状は比較的軽くすみますが、ヒトパルボウイルスB19は伝染性紅斑以外の病気の原因にもなることが分かっています。例えば、溶血性貧血など、貧血症の人が感染すると急性の重い貧血を起こすことがあります。溶血性貧血では発疹が見られない場合が多いの

で、青ざめて息切れが強くなった場合は、すぐに主治医の治療を受ける必要があります。また、白血病やがんの患者さん、先天性免疫不全や臓器移植を受けた人など、抵抗力の下がっている人は、ヒトパルボウイルスB19の感染によって重い合併症に陥る可能性があるので注意が必要です。

妊婦さんや妊娠の可能性のある人は 風邪症状のある人には近付かない

妊婦さんや妊娠の可能性のある人も伝染性紅斑に注意しましょう。妊娠中に、ヒトパルボウイルスB19の感染により重大な合併症が起きる可能性があるからです。風疹と同様、ウイルスが胎盤を通過して胎児に感染を起こし、流産や死産、胎児の浮腫と貧血（胎児水腫）を起こすことがあります。特に妊娠前半期にパルボウイルスB19に感染した場合、胎児が亡くなる可能性は低いですが、0%ではありません。

もちろん妊婦のヒトパルボウイルスB19感染が、すぐに胎児の異常に結びつくものではありません。伝染性紅斑を発症した妊婦から出生し、感染が確認された赤ちゃんでも妊娠・分娩の経過が正常で、出生後の発育も正常であることがほとんどです。

妊娠中に感染した場合でも、あまり深刻に考えず、主治医と相談して超音波検査などでお腹の赤ちゃんの状態をよく把握することが大切です。そして、妊娠中や妊娠の可能性のある人は、ヒトパルボウイルスB19感染を防ぐためにも、風邪のような症状の人に近づくことを避け、手洗いやうがいをきちんと行いましょう。

次号（2017年4月号）では
「百日咳」を取り上げます。